

音楽科授業案：
教科で育みたい人間像「よさを見いだす、心豊かな人」

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部附属静岡中学校 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 兵庫, 廣多 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/0002000484

音楽科授業案

教科で育みたい人間像 「よさを見いだす、心豊かな人」

授業者 兵庫 廣多

- 1 日時 令和5年11月2日(木) 第1時 10:20~11:10
- 2 学級 1年A組 (音楽室・社会科教室)
- 3 題材名 旋律を味わい創作する ―教会旋法の曲を通して―

4 本題材で願う学び

教会旋法(チャーチモード)を用いてつくられた曲を鑑賞し、曲から感じとった雰囲気(曲想)をもとに旋律を試行錯誤しながらつくり出す活動を通して、旋律を生み出すことの難しさや喜びを体感し、旋律自体が醸し出す雰囲気を楽しむ。また生み出された音楽を聴き合い、人それぞれの曲のつくり方やよさがあることに気づき、音楽の多様なあり方について感じとる。

(学習指導要領との関連：A表現(3)創作、ア、イ(ア)、ウ [共通事項] 旋律、音階)

5 これまでの子どもの学び

これまでに子どもたちは、表現領域の題材において、自分自身がどのように音楽とかかわるかについて考え、主体的に音楽に親しみながら授業をつくりあげてきた。その中で、以下のような子どもたちの学びを見ることができた。

一つめは『附属静岡中学校校歌』を題材に、個人追求課題を決めて歌唱の表現活動に取り組んだことである。題材の導入において、中学校に入学して間もない子どもたちに校歌を歌う意味や価値を問うことで「自分にとっての『校歌を歌う価値』とはなんだろう」という疑問をもち追求活動を進めることができた。

自分にとっての歌い方を追求し「自分に合った声の高さとは」「曲の盛り上がる部分を表現するためには何を意識する必要があるのか」など、校歌の歌い方を模索することを通して「音楽の当事者」として表現活動に取り組むことができた。

「記号について知ってから歌うことでより気持ちを込めて歌えるようになった」と表現活動を通して気づきを得るようすや、「『自主独立』という歌詞をはっきり歌えているか確認するために自分の声を録音してみた」というように、自分自身が考えた表現に近づくように聴き比べるようすがみられた。

このような活動を積み重ねる中で、題材のまじめにあたる語り合いでは「歌がうまい」といった一面的な見方ではなく「人によって異なる表現方法があってよい」「今の歌と昔の歌では歌い方が違って、それぞれのよさがあるが、歌の基本は今も昔も変わらないのではないか」といった歌唱表現についての多面的なとらえ方ができるようになっていった(図1)。

しかし一方で「私は弱々しい声になってしまうから、お腹から声を出し、強弱をつけたい」「音程を正しく歌

いたい」「声が裏返らないように歌いたい」といった「校歌の歌唱表現」ではなく、一般的な歌唱方法や歌の技能面にばかりに意識を向けて追求する姿も見られた。このような姿から、子どもたちが表現を深めていく過程において、歌いながら追求活動をすることにより「表現してみたいという意欲がわくことを実感できる学び」を実現していく必要があると感じた。

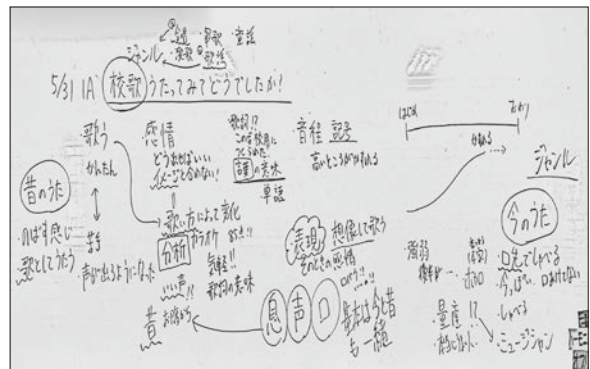


図1 語り合いの板書

二つめは、楽器や曲の特徴を生かして器楽表現に取り組んだことである。『喜びの歌』『アニーローリー』『オーラリー』の3曲をアルトリコーダーで吹く題材において、曲を吹けるようになることを題材の中心にはせず、楽器の吹き方(管への息の入れ方、アーティキュレーション等)について味わいながら追求をおこなうこととした。すると、これまでの音楽経験からリコーダーについて苦手意識をもっている子どもであっても「今の音きれいだった」というように楽器の音に注目し、自分が音を紡ぎ出す喜びを伴った発言が見られた。正しく曲を吹くことよりも、管楽器の音に親しもうとすることで「楽器は正しく吹かなければならない」というイメージが変化したのではないかと考える。子ど

もたちは次のように活動を振り返った。

- ・今回は、強弱やアーティキュレーションを考えました。息継ぎは、元々楽譜に書いてあったので、そのままやることにしました。でも、透き通った音を出したいのに、出せないで困ります。
- ・アーティキュレーションをつけるとき、つなげればいいのか伸ばしていいのかでかなり迷った。こういうときに友だちがいるとよい。
- ・今回は音の出し方を考えながら吹いた。よくピアノのレッスンで、高い音を出すときは1番高い音はぶつけないで登る感じに演奏して、と言われるのでそれを使ってやってみた。他にも使えることってないかな。
- ・今日はみんなでアルトリコーダーの共有をして、私の考えになかったコツが出てきてとても参考になりましたが、自分が見つかったコツが1番やりやすいです。「膨らまして舌を上げる」のは力を入れるのでとてもきついです。そうすると自分にとってはいい音が出ます。さらに無理なくいい音が出る方法を追求していきたいです。
- ・今日は主に低い音を出す練習をしました。個人的に低い音のイメージは、太く息を吐く感じで（一定で）「ぶおーん」というか「ぶあーん…？」って感じです。あとコツとして、少し視線を下にすると低い音が出やすく感じました。逆に高い音の時は少し上に向けて虹をかけるような感じで吹くといい思いました。直線でバーンというよりかぶあーんって感じです！あと、いいと思った意見があって、曲をイメージするというのがいいと思いました。「アニーローリー→川」「喜びの歌→オーケストラ」「オーラリー→深い森」みたいなイメージです。

(活動の振り返りより)

このように音に親しみながら楽器の音をつくり出す楽しさを見いだした子どもたちは、楽器の演奏をすること（表現方法も含め）に対する視野が広がり、そのよさに気づいたり、楽器の演奏をより注意深く聴いたりすることができるようになるのではないだろうか。

入学してからこれまでの「表現領域」の学びを通して、主体的に音楽を味わいながら活動に取り組むことで、自分の出したい音を追求することの楽しさを感じ

始めている。個々の音楽的な視点（音楽を形づくる要素）を意識しながら題材を追求し、さらに多様な音楽の表現活動に取り組むことで、より音楽について深く味わうことができるようになるだろう。

6 題材観

これまでに歌唱表現と器楽表現について学んできた子どもたちは、音楽を「自分で表現する」ことの楽しさを見いだしてきた。本題材はこれまでの学びを生かしつつ、旋律の創作の活動に出会うことで、新たな音楽の味わい方や奥深さ、表現の多様さに気づくことのできる題材である。

(1) 本題材の価値

①音楽を自分でつくることの価値

幼少期に歌詞の意味が分からずとも、聴いた音楽を一生懸命歌うという経験や、自然とリズムを刻み、叩いて音を出すという経験をしたことのある人は少なくはないだろう。また年齢に限らず、気分によって鼻歌を歌うことや音を出して何かを表すことは、人間にとって自然な営みである。

「音楽をつくる」ことを考えたときに、楽譜を読むことの難しさや楽器演奏の経験のなさから、初めから「できない」と感じる人が多いかもしれない。しかし、幼少期の「自然に」音楽に親しんでいた感覚で音楽に向き合うことができれば、音楽の楽しさを味わいながら音楽をつくることのできるのではないだろうか。

「作曲」という譜面を書く行為だけが音楽をつくるということではない。特別な技能はなくとも「音で表してみよう」とすることで、気づくことのできる音楽の価値は多分にある。音楽をつくることで、いままでよりも音から受ける印象がきめ細やかに感じられるようになり、これからの人生の中で、音楽の感じ方がより豊かになっていこう。そして自分の中から、人に伝えたい何かしらの思いが巻き起こったり、自分のつくった音楽から人が何かしらの思いを受け取ったりすることができたら、とても素敵なことではないだろうか。

②教会旋法のもつ価値

教会旋法（チャーチモード）は音階（スケール）自体が独特の雰囲気醸し出すため、旋律のもつ音楽の味わいを体感的にとらえることができるという音楽的な特徴をもっている。現代の音楽において使われる音階は「長調（メジャースケール）、短調（マイナースケール）」に分類されることが一般的だが、中世やルネサンス期の音楽で主な音階として用いられていたのがこの教会旋法である（図2）。

Cイオニアン	
Dドリアン	
Eフリジアン	
Fリディアン	
Gミクソリディアン	
Aエオリアン	
Bロクリアン	

Cイオニアン	
Cドリアン	
Cフリジアン	
Cリディアン	
Cミクソリディアン	
Cエオリアン	
Cロクリアン	

図2 教会旋法のモード一覧

教会旋法が用いられた音楽は「明るい・暗い以外の独特な雰囲気（神秘的、不安定さ、ダークさ、民族的な響き等）を醸し出すことができる」という不思議な魅力がある。教会旋法を用いた曲は身のまわりに存在しており、ゲーム音楽や店内のBGM等に使用されることが多い。教会旋法はそれらの「世界観」をつくりだすために必要とされる要素であり、自然と目の前に情景を想起させ、豊かに広がる世界観を味わうことができるものである。普段私たちは、無意識的にそれらの要素を味わっているが、教会旋法をじっくり味わった人であれば、音楽理論への新鮮な気づきとともに、その世界観にさらに身を委ねることができるだろう。

教会旋法の中でも、特にドリアン旋法を用いてつくられた旋律は「異国情緒」や「ファンタジー」の要素をもち合わせているように感じられることが多い。イングランドの伝統的な民謡である『スカボロー フェア』（曲1）はドリアン旋法でつくられた曲の一つで、「不可解な歌詞」と「不思議な旋律」が耳に残る、独特の世界観を醸し出す名曲である。



曲1 『スカボロー フェア』

『スカボロー フェア』の旋律を耳にしたときに感じられる曲の雰囲気が、教会旋法の要素から醸し出されるものであると気づいたとき、音楽のもつ多様な側面やあり方を感じ、個々の音楽の世界観を広げることにつながるだろう。「音楽の世界観が広がった」という実感は、音楽そのもののもつ価値への理解を深め、より音楽を人生に取り入れていこうとするきっかけになると考えている。

(2) 本題材で願う子どもの姿

本題材では「自分自身の音楽をつくりながら旋律を味わう姿」に期待したい。曲の感じをどのように表現するかを考えながら、自分の旋律をつくる活動はすぐにうまくはいかず、多少の困難を伴うだろう。例えば「もっと〇〇な感じの旋律にしたいのに、思ったような音楽に感じられない」という葛藤や「本当に自分のつくる旋律は〇〇な感じにそっているのだろうか」と迷いが生じることがあるかもしれない。そのときには、ともに音楽をつくる仲間へ助けを求めたり、仲間のつくる音楽を自然と聴きたくなくなったりするはずである。さらに「自分の旋律ができたけれど、自分以外の人へ聴くとどんなイメージをもつのか知りたい」という気持ちから、人に聴いてほしいという思いが生まれることもあるだろう。新たな音楽との親しみ方を体験しながら、より一層音楽のよさを味わう姿に期待したい。

また、仲間のつくった音楽を聴き合うことを通して、自分と仲間との表現方法の違いや多様さを感じる姿も見られるはずである。「共通の曲のイメージから旋律をつかったのに自分の表現とはまったく異なる曲になっている」「同じような音を使って旋律を創作したのに、なんで醸し出される曲の感じは異なったものになるのだろう」というように、子どもは旋律の感じ方の違いに多くの気づきを得るだろう。音楽の表現方法の違いは、人それぞれの考え方の違いであり、その違いを受け入れ合うことで「自分の音もいいけど、仲間の音楽も素敵だね」というようなよりよいものごとの受け止め方ができるようになるだろう。このように仲間と共有することで、音楽の違いだけではなく、人それぞれの考え方や思いの違いを感じとる姿を期待したい。

本題材での気づきをきっかけにして、日常の音楽の聴き方の解像度が上がっていくような姿にも期待したい。そのような子どもからは「この曲もこの前聴いた

曲にとっても似ていると感じた」といった日常生活の中にある音楽との結びつきにも目を向けていこう。

7 題材構想（全8時間）

- ①どのような感じのする曲なのか（1時）
- ②旋律をつくってみよう（2～4時）
- ③旋律をよりよくするために仲間と聴き合おう（5時）
- ④曲の完成に向けて旋律の手直しをしよう（6時：本時）
- ⑤完成した曲を共有し、旋律づくりから学んだことをまとめよう（7～8時）

8 題材構想における授業者の考え

本題材では、旋律がもつ音楽の雰囲気について味わいながら創作活動を行う。曲の雰囲気は、旋律、リズム、和音、音色等さまざまな要素が複合的に絡み合っていて表されているが、一般的には「音の感触」として、ただなんとなく耳や頭で処理されて感じとっていることが多いだろう。普段リズムや旋律について意識をして聴くことは少ない分、本題材を通して「旋律」に注目して音楽にふれる経験をすることで、音楽のもつ要素を存分に感じるができるだろう。

また、音楽を通して人が感じる「〇〇な感じ」「〇〇っぽさ」などの感覚は、誰しもがある程度共通して感じることができると考えられる。本題材で曲をつくるにあたって、共通でめざすべき「〇〇な感じ」について意見を出し合い、共有することによって、音楽づくりのイメージをもてるようにしたい。同じような「曲の感じ」をめざして音楽をつくり、そこに表される曲の違いについて繊細に感じとったとき、音楽（旋律）のもつ幅広い表現力を実感することができるだろう。

(1) 導入の工夫（1時）

旋律が醸し出す独特な雰囲気を味わうために、『スカポロー フェア』の鑑賞から題材をスタートする。この曲の旋律が醸し出す、音楽の雰囲気を味わうことを大切にするため、曲づくりを行うことは伏せておく。歌が伴った鑑賞曲であるため、子どもにとってなじみやすく、様々なイメージが喚起されるだろう。曲から感じた印象について共有し、おぼろげながら共通のイメージが浮かび上がってきたところで、授業者が「〇〇な雰囲気のする曲をつくることができそうか」と子どもたちに問う。共通の曲のイメージをもった子どもたちは、本題材の活動に強い関心を持ち、ぜひ取り組んでみたいという前向きな意思を示すはずである。

(2) 創作活動（2～4時・6時）

旋律の創作にあたっては、学習用端末のGrage Bandを用いることで自由度の高い創作活動を実現していきたい。創作の授業では、子どもたちの思い描いた音を自由に思う存分表現できることが一番大切であると考えている。しかし創作活動は自由である一方で、自分のつくりたい音楽に自信がもてなかったり、自分の思い描く音楽になるのか不安を感じたりすることも多い。そのため、正解が決まっていないからこそ授業者は子どもの活動に寄り添う必要があると考えている。「旋律の感じはあなたにとってどう感じるか」「途中までの部分で表現したいことが伝わってくるよ」などの子どもの思い描く表現に寄り添う言葉がけとともに、音楽づくりの方向性を子どもとともに共有していく。

(3) 仲間の旋律を聴き合う中間共有（5時）

創作活動の途中で、自分の曲がよりよくなりそうなヒントを得るために中間共有を行う。授業者は、意図的に表現方法の異なる小グループがかかわるように共有の場を設ける。子どもは共有することを通して、自分の曲とは違う新鮮な印象を得ることだろう。同じ曲について、受け取り方の異なる意見が交わされることも価値のある共有につながるため、学習用端末上で音源の作成ファイルを送り合い、曲についての思いを伝え合いやすい場となるように配慮したい。

自分の創作した旋律の意図や思いが人に伝わることを確認したり、自分の想像していなかった音の使い方に会ったりすることで「もっとこうしたい」という創作意欲がわく時間としたい。

(4) 曲の共有とまとめ（7～8時）

自分がつくった曲をGoogle Classroomにアップロードすることで、仲間と音楽を共有する場面を設定する。その際、聴いた曲についての印象をコメントすること

音楽科授業案

で、仲間が感じたイメージを知ることができるだろう。コメントの中には自分の思った通りのものもあるかもしれないが、大半は予想していない印象を伴った感想であることが予想される。自分の意図していない受けとり方をされたとしても、思いが伝わらなかったということではない。自分の思い描いた何かしらの思いが音を通して人に伝わり、曲にその人の解釈が加えられ、音楽に命が吹き込まれる瞬間というとらえ方もできるのではないだろうか。曲が完成したとき以上に音楽に意味が生まれ、曲が自由に羽ばたいていくような感覚をもつこともあるかもしれない。「人によって音楽の受

け止め方は千差万別であり、人には多様な感じ方がある」という気づきを得るために共有の時間を大切にしたい。

本題材では曲を聴くことから着想を得て、音楽を自分自身で創作し、人とその音楽を共有することで、授業という形態だからこそ味わうことができるかけがえない体験ができる。本題材を存分に味わった子どもたちが、世の中にある音楽に対してよりきめ細やかに感じられるようになり、学習する以前より解像度の上だった音のとらえ方ができるように願っている。

9 予想される子どものあらわれ

時数	活動、問い	子どものあらわれ
1	<p><u>どのような感じがする旋律なのか</u> 【ドリアン旋法の音階を用いて作曲された音楽を聴き、旋律づくりについてめざす雰囲気共有する】</p> <p>○『スカボロー フェア』を聴かせ、どのような曲の印象があったかを意見交換し曲のイメージを共有する</p> <p>○出てきた意見をもとに「○○な感じの曲」という目指す曲のイメージを共有する</p> <p>○使用される音階によって曲の印象が変わることを紹介する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽を聴く活動は好きだ ・今日はどのような曲を聴くのだろう ・さびしい感じのする曲だ ・叶わなかった夢の感じがする ・過去のことについて後悔している曲なのではないだろうか ・曲は明るい感じがするけど暗く感じる部分もあった ・転調しているわけではないけど曲の雰囲気が微妙に変わる気がする ・独特の世界観がある曲だった ・拍子は3拍子なのだろうか ・ギターの寂しい音色が曲の雰囲気と合っていた ・曲の調性によって明るさや暗さが変わるはずだ ・使う楽器によって曲の雰囲気が変わるのではないか ・あまり音程の変化がないような気がするけど、明るい曲は高い音程が使われるのではないか ・曲は暗いけど暗すぎない曲な気がする ・切ない感じがするから喪失感のある曲だと思う ・暗い中にも少し希望や明るさを感じる曲だ ・悲しい感じの曲なら使われる音階のイメージがわくぞ ・短調で作曲されているはずだ ・音階によって雰囲気が変わるの不思議だ ・旋律の雰囲気が変わるのなぜだろう ・ドから始めた音階とラから始めた音階は理解できるけど、それ以外の音から始めた音階は違和感があった

	<p>○全体で曲のイメージが共有できたタイミングで「こんな感じの曲ってできそう？」と問う</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・え？つくるの！？ ・つくってみたらおもしろそう ・どんなふうにつくろうかな ・ピアノを使ってやってみようかな
2～4	<p>旋律をつくってみよう 【旋律についてのイメージを膨らめ、どのような音を使うと自分のつくりたい旋律になるのかについて試行錯誤する】</p> <p>○どのような旋律をつくっていくかについて仲間と意見交換する</p> <p>○Grage Bandを用いて個人で旋律づくりを進めるようになげかける</p> <p>※なかなか創作活動に入ることのできない子どもに対しては、音に使用する音階の始まりの音と終わりの音を提示することにより、明るさや暗さ等のイメージがもてるような工夫をする（ドリアン旋法→レ、フリギアン旋法→ミ、エオリアン旋法→ラ）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・音階については少し理解できた気がするけど、曲にどう生かしたらいいのだろうか ・「○○な感じ」ってどのように表したらいいのだろうか ・まずは楽器の音色を選びたいな ・ガレージバンドの使い方がわからないから教えてほしい ・まずは音をつなげて入力してみよう ・音を重ねてつくったら曲の雰囲気に変化するのではないか
5～6	<p>仲間と旋律を聴き合い感じたことを伝え合い、旋律の手直しをしよう 【創作過程の旋律を聴き合い、自分の発想にはなかった旋律のもつ雰囲気を知り、仲間からもらった意見をもとにして自分の旋律をよりよいものにしていく】</p> <p>○数人のグループにわかれて、つくった旋律を聴き合い、感想や感じたことを伝え合う</p> <p>○曲の完成に向けて、自分のつくった旋律をよりよいものにしていく</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・途中だから聴かせるのはためらってしまう ・人のつくった旋律を聴くのは楽しい ・自分と違う曲の感じがするのはおもしろい ・もっと楽器の音を変えてみるとイメージ合った曲になりそう ・旋律が滑らかになるともっと「○○な感じ」に近づくのではないかな ・仲間からもらった意見をもとにして曲を完成させていきたい ・次回の曲の聴き合いに向けてさらに曲をよくしていきたい
7～8	<p>完成した曲を共有し、旋律づくりから学んだことをまとめよう 【つくった旋律を共有し、仲間の旋律にコメントをすることを通して、音楽やその感じ方についての多様性を感じる】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・曲が完成したので聴いてもらうのが楽しみだ ・自分の曲はイメージ通りになったか聴いてもらいたい

	<p>○Google Classroomに自分のつくった旋律をアップロードし、仲間の旋律には聴いて感じたことをコメントする</p> <p>○旋律づくりを通して感じたことや、自分が考えたことについての思いを全体で共有する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・以前の曲よりも曲の雰囲気合った旋律になっているな ・同じ「○○な感じ」から曲をつくっているのに人によってこんなに雰囲気が違うのか ・自分の曲をつくることは難しいと感じていたけど完成してよかった ・旋律を考えてつくることは奥が深い ・音の並べ方を変えるだけで曲が変化するのすごい ・普段聴く曲も旋律について考えてつくられた曲がたくさんあるのだろう
--	---	--

参考文献：長谷川諒（2023）『中学校音楽「主体的に学習に取り組む態度」の学習完全ガイド』明治図書出版
 彦坂恭人（2018）『実践！作曲・アレンジにいかすためのモード作曲法』株式会社自由現代社
 和田崇・清水宏美（2019）『心が動く授業づくり はじめよう！音を楽しむ音楽づくり・創作の事例集』株式会社全音楽譜出版社

参考資料：超ファンタジー！異世界転生に使える音楽理論「モード」

<https://youtu.be/2PURuRnhMbc>

モード（Mode）の印象についてまとめてみる～サウンド感をコントロールする7つのモードスケール～

<https://www.youtube.com/watch?v=7DsTvtYVE1s>